



わたしの聖戦

女性が働くことについて

118

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

福島を歩く

311東日本大震災から、1年と半年近くが経過した。今なおその傷跡が生々しいなか、どうしても福島原発が見たいという欲求を抑えきれず、車を走らせた。

といっても、原発から半径20キロメートル内は立ち入り禁止区域になっているため、原発そのものを目にすることは不可能だ。それでも行けるところまで行ってみようと思わずに走った。

東京方面から常盤道を進むと、広野―常盤富岡までは通行止めとなっており、やむなく広野で降りる。車もほとんどなく、段々と寂しげな雰囲気になっていくのは予想どおり。海岸沿いにそびえ立つ異様な建物に一瞬ぎよつとしたが、後に広野火力発電所であることがわかった。311当初は地震と津波の影響を受け一時運転を止めていたが、今では全面稼働しつつ、尚増設中だという。

その原型を想像するのは難しい。堤防から少し離れた家々は、外枠だけかろうじて踏ん張っているが、中身は惨たんたるもので、とても人が住める状態ではない。荒涼とした土に残る、がれきや倒れた電信柱から伸びる草花が痛々しい限りであつた。



た。警戒が解除になったのはそれなりの根拠あつてのことだろうが、歩いてみるとかすかにめまいと吐き気を感じた。目に見えない放射能は、人間の期待を裏切つて、一筋縄ではいかないしぶとさで日本を覆っているのを実感する。

ちようどその前日、広野に隣接する榎葉町が警戒区域解除になっている。私が行ったところは、まさに広野から榎葉にかけての区域であり、本当に行けるところギリギリであつたことを後に確認した。

大な津波が押し寄せる映像が何度も流れた地域である。やはり海岸近くの家はほとんどが流されていた。土台だけ、キッチンだけ、風呂のタイルだけ、かつては家の一部であつたそれらが無機質に残っているのがむしる残

酷に映る。言葉がないとはこういうことだと、ただ無言で見つめるしか術がない。堤防には、慰霊の花々が供えられていた。「神のご平安を祈ります」の文字が書かれた札もある。今日の前にある静かな海が、再び怒り狂うのを鎮めるおまじないのようなものだ。天災や感染症で悩まされた日本では、昔からひたすら祈ることです。

「病気の神」「自然の神」をなだめる信仰が根づいている。喉元過ぎれば、このことわざどおり、人々の記憶が都合よく薄れていくのを見計らつて、疫病や自然は何度も牙をむくのだ。「地球にやさしく」とか「自然との共生」などとよく耳にするが、軽々しい言葉はここでは何の意味も持たない。こうべを垂れ、瞑目し、ただ合掌するのみ。イラスト・伊藤栄章